

Windows7 から 10 へ無料 update 実行。

友の「素人はやめとけ！」の忠告に聞く耳持たず。さて、快進撃とは程遠く、面倒な復元とトラブル解決に2か月の奮闘。ハトハトの終盤近く、試しに、お気に入り「Rokko15」にアクセス。

クリック途端、安嶋大兄のイケメン顔と同時に、我が母校「北野小学校」テロップが画面いっぱい突如現る。我ら15期代表取締役は、若くてキラキラしており、全く、想定外の“Back to the Past”への真夏の誘い。

これは、Windows10 up の際の、「ワルさ」の1例で、「北野小学校」の思い出もよみがえる。

今までは、封印しておきたかった。だが、いわゆる「歴史直視」手法を採用すれば、きれいごとでは済まされない、母校で体験した教育現場。トーア・ロードの中山手に面し、今や校舎は存在するが、合併・廃校で meltdown。思い出したくはないその過去がよみがえる。以下、少々長くなるが・・・

小学4年生の秋、京都の、田舎も田舎の天田郡から転校。転校を前に、凶体も声も顔もやたら大きい、担任ではない教頭のN先生から、要約すれば、「神戸の小学校は、こことは大違い、全てが進んでいる。慌てず、気落ちせず、先生や生徒をよく見て、学べることは学び、真似していけないことは真似るな。そのため、物事をしっかり見る目を養え。君ならできる！」

丹波の country-boy から摂津の city-boy への旅立ち。確かに、全てが驚きであった。黒塗り（爆撃回避目的）の分厚く頑丈な鉄筋校舎とコンクリー塀で囲まれた四角い小さな運動場。直線でなく、円形にチョコマカとクルクル走る競争が珍しかった。

田舎では、木造校舎で、運動場は山・小川・畑・畦道に接し、

境界も定かでなく、走り競争は直線コースで、しかも、それが片隅にあり、とにかく広い。むき出しの土壌で、競争はハダシ。ただ、石とゴミ拾いは日課であった。

休み時間は、子猿のように木に登り、崩れる土肌の崖にのぼり、横に流れる小川では、フナ、カエル、エビ、カニ、セミを捕り、また、マムシやカラス蛇の多い所で、向かって来たら、釘を先端に刺した木棒で、頭狙いをして一撃で仕留める。この業物は、当時の「携帯」。

頭以外を狙うと、跳びかかり・咬まれると教えられていた。ここでは、蛇を怖がるような男の子は、存在感がない。畑で、農作業後の休憩で寝ていた人の口から蛇が入り込み、死亡する事件があり、蛇は大人にも子供にとっても、一撃で倒すべき敵であった。

中学の学行事の京都（琵琶湖？）旅行で、瀬田川で数人とボートに乗り、小さな中洲へ接近。石垣をマムシが横断中。とっさにオールを引き抜き投擲。頭部を直撃し、へたる。この早業を目撃された同級生がおられるはず。でも、今は、蛇を見ただけで道を譲るであろう。

全校同窓会

さて、北野小学校。ここには、「全校同窓会」がない。一度だけ、六甲の先輩が企画され、「君も手伝え」と、高1の頃？、ご指示を受けて、近所に住む小学校卒業生への、出席参加の戸別の勧誘訪問をさせられた。聞き置く人が多い中、学校のことは思い出したくないの反応も。

六甲の制服と制帽着用での家庭訪問であったが、この反応を、訪問を嫌がっていると思われるので、先輩へは報告はしていない。親にはした。役目柄とは言え、善意でことは進まない。

他人から、自分には責任のないことで、
非難らしきことを受けることは、多分、初めての経験。

学級裁判

北野小学校には、一部のクラスに「学級裁判」があり、
中国から復員の担任から、小生への転校ガイダンスで、
言われたことは、今も記憶にある。

「人民中国では人民裁判があり、ここでは学級裁判がある。
また、生徒による自由研究の発表がある」と。
ずっと後で得た情報では、彼は共産党員。

田舎では、山陰線の小駅前広場に自転車を台に、
「紙芝居」の男が二人。

小学1～2年生で遊び仲間と、遊びを中断して、
ボケーと見ており、内容は理解できなかった。

棒の付いた飴も売っており、

もう一人はじろじろと周囲を見て、痩せて怖い顔の記憶がある。

飴を買った子は、前列の特等席へ。

買わない子は後ろへ、その都度、小生などは、下がらされた。

普段は遊び友達からの、席の入れ替え時に、

「下がれ」の目つきが、遠い記憶にある。

子供世界の現実は厳しく、このような立ち見席の入れ替えは、
格差助長の歴史的実践の例。

紙芝居では、サーベルのお巡りさんたちが後ろ手につながれ、
「てんのうを〇〇〇〇！」と彼が叫ぶと、

横の痩せた男がさらに声をあげ、

我々に「一緒に」と唱和を催促した。

やがて、共産党の宣伝隊（村で、アカセンと言われていた）、

とのうわさが村で広がり、党名もこの頃、知った。

やがて、来なくなった。

後日、京都方向へ向かう山陰本線のこの村の小駅を、
天皇皇后両陛下が通過、村人が線路沿いに並んで手を振り、
車窓で、立たれて手を振られるのを見た。

この駅では、普段は、村の子供の遊び場であったが、
時折り、「買い出し集団（村では、買い出し部隊と言っていた、

説明省略)」への手入れがあり、
小生と同じような年頃の子供を連れた女性たちも混じる集団が、
警察に追いかけられ、様々な方向へ逃げるのを何度か目撃。

捕まれば、駅前の空き地に座らされていた。
役目とはいえ、追いかけるほうも辛かったのでは？
親戚が「日本通運」の店を預かり、
手回しエンジンのトラック（木炭自動車と呼ばれていた記憶）
が一台あり、没収の食料を運ばされ、
辛いと言っていたと母から聞いたことがある。

法治の中の無法、無法の中の法治、様々な悲劇が展開され、
国破れば、このような悲劇は、同じ国民が二手に分かれ、
しかも、確実に保証される。

この駅の線路のそばで、自然の凄さを経験した。
急に雨が降り出し、びしょ濡れに。
ところが、目の先の線路と北側は濡れもしない真夏の日差し。
別に驚くことではないが、体験すると感慨は別。
今も、雨が降ると思い出し、
「降水確率50%」とは、「二人一緒に歩いていて、
一人が濡れること」も成り立つ大発見！

北野小での自由研究

研究発表では、画用紙をつなぎ合わせて、黒板に貼り、
イラストや文章で、研究成果を発表。
生徒が**教師専用の教壇**で説明するのは、
田舎出の小生には前代未聞。
また、「生徒」と「研究」が結びつかない。
その程度（低度）の小生の理解力。
「石炭と電気」に関するタイトルが記憶にある。
やがて判明したのは、発表者はいつもの数人であり、
当時発行された「少年朝日年鑑」からの丸写しであった。

さて、学級裁判では、被告は、毎週、
母親か姉が、駐留軍相手の「バー」の女の子で、
クラス全員が、1週間、口をきかないとの厳しい判決。
検事は、いつも、三宮の食品加工店の息子で、しつこかった。

きれいな（と思った）姉がいて、時折、朝の授業前に、運動場の隅で、この弟の鉛筆を削ってやっていた。姉がいない小生には、印象的であった。

裁判長は、級長で、クラスで一番人気でポチャ顔の可愛い小柄な女の子。弁護士不在、傍聴席にはクラスメイトが。判決に、拍手を以て応え、被告はいつも俯いていた。裁判の成り行きを、無言で、教師Zは立って腕組みをして見ていた。

突き詰めれば、ここには、ドグマが避けて通れない欺瞞的性格と、それを掲げて、正義と称する側が陥りやすく嘘くさい理念が、「場」を支配し、抑制が利かなくなっていて、これをあるべき理想状態として、しかも、秩序正しく洗脳される。

生徒のあどけなさ、その無知のもたらす恐ろしさ、その結果は、まだ幼い一女生徒のいわれなき犠牲と苦痛、それをガイドする教師が発動する、狂気とも言える教育現場。ここには、この当然の責任者は、安全圏で見物し、彼がもたらす被害者への救済もなく、他の教師も関知せず、関わろうともせず、勝手な本能頼りで、気ままな戦後混乱の無責任時代。

当時の人々が希求したであろう平和な戦後教育は、ここでは、芽生えることはなかった。敗戦後、時を経ての、北野小の廃校の遠因は、ここにあり、従って、我が母校は、抵抗することなく、無条件降伏で武装解除され、責任を取らされた。

この教師は、熱血教師の通り相場で、PTA（役員はすべて、いわゆる職人）の間でも人気。そのPTAも、小学校運動会で、会長と副会長が真っ赤な唇で女装し、パンを二つ小枝にぶら下げ「パンパンガール」と大書して、まことに場違いな二人が闊歩する、敗戦後の無法小学校。

男の女装を目にしたのは初めてで、
TVで女装が出ると、この二人を思い出す。
クラスメイトの親たちである。

また、当時はドッジボール全盛期で、
狭い運動場で毎日のように遊んだ。
男子生徒の一部には、暗黙のルールがあり、
教師Zを狙い、彼は、多分それを感じていたであろうが、
我々へも、容赦なく強烈に返してきた。

いつも、白い襟が大きくはみ出た清潔な白シャツに、
当時、薄ネズミ色の服で、頭は黒くテカテカと。
鼻の先端表面の毛穴？が黒く、赤みがかった大きな鼻と、
血色のよい顔とよい姿勢。

卒業後に聞いたのは、他の教師からは、
「アカハタナ」と言われていて、この新造語は、
様々な意味がブレンドされた合成語であり、
「あかさたな」の五十音もじりでもある。

伊藤校長と小使いさんの遺徳
北野小学校の校舎が大空襲の最中でも現存するのは、
戦時中、伊藤校長と小使いさんが、毎日寝泊まりして、
屋上の焼夷弾を拾っては下へ投げたから。
まさに、その遺徳を思いたい。責任感溢れる行為である。
ここに、謹んでその徳を、卒業生として、
役目不足とは言え、顕彰したい。
また、お二人の鎮魂を心から・・・・・・・・。

校舎の周囲は、焼け野が原だったらしい。
このようなことを、捨て身で実行されたお二人の偉大さに、
頭が下がる。これ、できる人いるであろうか？
小生なら、できなかったであろう。

小使いさん（名前が思い出せない）は、
転校してきた小生に、話しかけてくれ、これはよき時代。
小生も、職員室の真向いの「小使い室」を時折、訪ねた。
暗いが、きちんと部屋が整理され、

端正な顔で背が高く、細身で姿勢が少し前かがみ、
感じのいい老人で、茶を飲みながら、話をされた。
太い縄紐がバンドだった。

小生は、小さい頃から、
年上の人と話すのに違和感がなかった。
田舎の駅では、駅員室へ入り込み、タブレット操作に見とれ、
外では「転轍機」操作を見て、憧れた。
駅長（同級生のオヤジさん）も駅員連中も優しかった。
これらの鉄道用語も当時から知っていた。

教師像の違い

田舎では、教師は生徒に溶け込んでいた。
しかし、授業はスローで、教科書は進捗度半分で進級。
宿題は出るが、よくさぼり、その件で
復員後、神戸で単身赴任していたオヤジに、週末に帰ってきて、
ぶん殴られたことがある。
遊びすぎ、窮して、
「宿題はした」とばれるような嘘をついたため。
以後、懲りて宿題はするようになるが、
根性の点では問題を含む。

北野小学校は、自宅から 500mほど西に在り、
日曜には、上級生や生田中学生との野球の遊び場であった
そこでは、大きな旗を振り回し、運動場で声高に歌う、
4人の教師軍団（男性二人で一人は住職と女性二人）。
彼らは、職員室ではなく、空いた教室で会合し、
思えば、他の教師とは距離があった。
度々、自習させられ、授業をしていないクラスもあった。
また、地の利からか、先生によるデモの集結と出発校であった。

時移るとともに、父兄も分かりだしたのか、
転校を検討したり、近くの諏訪山小学校を見学する例も聞いた。
小生もオヤジに誘われ見学したが、5年生になっており、
今さら、他校への通学は回避したく、難？を逃れた。

小生の手持ち情報は以上だが、父兄の間には、
もっともっと多くの情報が錯綜していたであろう。

ただ、両親は、学校のことについては何も言わなかった。

六甲中学へ

近所に、六甲の制服を着た、北野小OBの憧れの先輩がおられ、六甲12期（故人）で、この先輩の父君と小生のオヤジが親しく、六甲受験を勧められ、小生は危うくセーフ。

入学して嬉しかったのは、べんちゃらを言うわけではないが、全教師が「教え、導くことに専念」タイプで、情熱があり、「よし、やろう」と決意を。

外国人教師もおられ、「世界が違う」と強烈な認識も。武宮校長の「学問の目的は、真・善・美の追求にある」は、今も、心の支えである。この師の「金言」を、子や孫にも言うが、どうも、一方通行。

ずっと後年、オヤジに「六甲を一口で言え」と言われ、「戦国時代の堺のような存在で、江戸時代の洪庵塾」と、見てもいないのに、一口で応えた。

もし、六甲学院へ入らず、恩師や諸先輩や級友との出会いがなければ、また、先輩の父君の勧めと、オヤジの決断がなければ、違う人生、違う人間形成が、なされていたのは確かで、六甲との結びつきに、感謝する。

後年、聞いた話で、尊敬すべき北野小の伊藤校長が、我々の担任でもあった、例の教師Z（教師？）に殴られ、このZも学校を去ったと。助命嘆願も有志から出たが、それなりの数に至らなかった。

伊藤校長は、戦時中は焼夷弾を浴び、安堵したのも束の間、戦後は、Zのような時限爆弾を背負わされていたことになる。

このような事情も影響してか、前述の北野小学校の全校同窓会は、ただの一回で終わり、最近、確認したところ、各クラス会の結成も少ないと聞く。われわれの学年では、同窓会は一度もない。

ただ一度、大学生の頃、同級生が十数人、急きょ集められた。クラスの女の子が、コロンビアの歌手デビューをし、当時の売れっ子の某歌手の神戸巡業で前座をつとめ、その前の日、彼女側からの接待で、料亭でご馳走に。小生は、会場での彼女へ花束贈呈の役割を、その母親に指名され、また、「皆さん、このような所で食べる機会はないでしょうから」の意味のご挨拶を受けたことを記憶する。

小生は、彼女が歌手になっていたことも知らず、おかげで、唯一のクラス会は、花街の花隈の高級料亭で、広くてきれいな和室での超豪華なすき焼き。美味かった。会費の徴収はなかった。

付記①：

当時、北野小学校の木造校舎棟の西北端に、生徒がアクセス厳禁の区域があり、禁を犯して潜入？したクラスメイトによると、女の人が裸でいたとの情報をもたらし、責任感の強き有志で、情報確認の実行を試みたが、気付かれ、中から、男の大声で怒鳴られた。小磯良平画伯の「絵画教室」であった。

付記②：

鈴木肇君との出会い。
中学入試模試で、会場の報徳学園へ。
教室へ入ると、黒板に白墨で「割烹」と達筆で、縦書き大書。「なんて読むんや？」「かっぽうと読むねん。料理のことや。かっぽうぎいうやろ」と、大きな声で得意げに、他のことも、とにかく、よくべらべらしゃべくる6年生。しゃべりに来たのか？ 試験に来ているのか？
「すごいのがおる」の試験会場の雰囲気。
でも、男子学校に「割烹」？

後に、六甲で一緒になったのが、この時の主役で、「桃から生まれた桃太郎」ならぬ、「口から生まれた鈴太郎」の鈴木肇君。今も、鮮明にして、懐かしき出会いであった。

付記③

京都府の田舎の小学校の校門角で、
黒で磨いた皮の長靴を履き、黒い帽子を着用し、
オート三輪の荷台で、細身の老人の選挙演説。
お付きは運転手が一人だけ。
小生は、演説の類が大好きで、
いつも、大声が聞こえると飛び出した。
母は、止めなかった。

この時の聴衆は小生と、家の角で立つ女性の二人だけ。
彼女の立つ位置と姿勢を今も記憶している。
我々は最後まで聴き、応えて手を振り見送った。
内容は、全く記憶にない。その容貌は、記憶にある。
こちらが若いせいか、かなりの老人に見えた。

内容が理解できていないだろうに、最後まで聴く、
面白い小学生がおると思われたかも知れない。
演説者は芦田均さんで、後の総理大臣。
出生地が近村の六人部（むとべ）村であった。
今となれば、
たった二人を相手に演説を行った芦田さんに、
敬意を表したい。
老政治家の誠意が感じられる。